



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	第4学年 体育「『動き』の達人になろう!」(II 実践報告 アクティブ・ラーニングの授業実践7)(fulltext)
Author(s)	小林,誠人
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属大泉小学校, 28: 298-301
Issue Date	2017-08
URL	http://hdl.handle.net/2309/148837
Publisher	東京学芸大学附属大泉小学校
Rights	

8 アクティブ・ラーニングの授業実践⑦

第4学年 体育「『動き』の達人になろう！」

実施 平成29年1月

対象 4年うめ組 30名

授業者 小林 誠人

1. 単元名 「動き」の達人になろう！（体づくり運動：多様な動きをつくる運動）

2. 単元の目標

○体のバランスをとったり、移動したりする動きや、用具を操作したり力試しをしたりする動きを身につけるとともに、それらを組み合わせることができるようにする。

（運動）

○運動に進んで取り組み、決まりを守り友達と仲良くしたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。

（態度）

○多様な動きをつくる運動の行い方を知り、友達のよい動きを見付け自分の運動に取り入れることができるようにする。

（思考・判断）

3. 評価規準

観点	運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
単元の評価規準	・体づくり運動に進んで取り組むとともに、決まりを守り、仲良く運動をしようとしていたり、運動をする場や用具の安全を確かめようとしていたりしている。	・多様な動きをつくる運動の行い方を知るとともに、友達のよい動きを見付け、自分の運動に取り入れたり、動きの組み合わせ方を選んだりしている。	・体のバランスや移動、用具の操作や力試しの動きとともに、それらを組み合わせた動きができる。
学習活動に即した具体的な評価規準	①体づくり運動に進んで取り組んでいる。 ②学習の決まりを守って、授業に取り組んでいる。 ③友達と仲良く協力をして場の準備や運動をしている。 ④用具の安全を確かめようとしている。	①運動の行い方を知っている。 ②運動の幅が広がる中で、自分（たち）にできそうな技、やってみたい技など、課題にあった運動の行い方を選んでいく。 ③友達のよい動きを見付け、自分の運動に取り入れている。	①姿勢や方向、リズムを変えて体を移動する動きができる。 ②用具を操作し、用具に合わせた動きができる。 ③腕の引き方や押し方、重心のかけ方などを変えて力試しの動きができる。 ④基本的な動きを組み合わせた動きができる。

4. 単元について

(1) 指導計画 (本時 5/6時)

	1	2	3	4	5 本時	6
5	○オリエンテーション ・単元のめあて	○整列 挨拶 ○準備体操 (菊の子エクササイズ) 音楽に合わせた体全体を動かすストレッチ ○本時のめあての確認をする				
10	と約束の確認 ・本時のめあての確認 「学習の見通しをもとう」	《力試しの運動》		《体を移動する運動》		
20	○体ほぐしの運動 ・力試しの運動と用具を操作する運動について、それぞれ簡単な運動に取り組む。	「力を入れる場所を意識していろいろなものを運ぼう」 ○協力して重い物を運んだり、友達を運んだりする。	「友達と力比べをしよう」 ○友達と協力したり、勝負をしたりして、力比べをする。	「それぞれの場所で運動の仕方を知ろう」 ○それぞれの場で動きについて確認する。	「友達ができない達人技をやってみよう」 ○それぞれの場で、いろいろな動きを試してみる。	「友達と達人技をしようかいし合おう」 ○グループの友達と動きのポイントを説明し合う。
30	・グループ分け ・押し相撲 ・おんぶでじゃんけん ・輪を腰で回す。	《用具を操作する運動》		《基本的な動きを組み合わせる運動》		
40	・ボールを使った、体ほぐし運動 ○振り返り	「用具を使って色んな動きを試そう」 ・輪、ボールの2種類を使った運動に取り組む。 ・輪とボールを転がす ・投げてキャッチする	「皆がまねしなくなる用具の使い方を考えよう」 ・グループ毎に考えた独自の用具の使い方を紹介する。	「基本的な組み合わせ技をやってみよう」 ○基本的な組み合わせ技について知る。 ・グループの友達と一緒に行う。	「他のグループができないオリジナルの達人技を作ろう」 ○グループで独自の技を考える。 ・できた達人技を紹介し合う。	「他のグループの達人技をやってみよう！」 ○他のグループが考えた達人技をやってみる。 ・できなかった技に対して、達人技の認定を行う。
評価	関①	技②③ 思①	技②③ 思②	技①④ 思①	技④ 思③	技④ 思①②

(2) 本時の教材について (児童の実態も含む)

本単元は、体育科学習指導要領第4学年「体づくり運動」にある【(イ)多様な動きをつくる運動】をもとに単元を設定した。4年生は、多様な動きづくりのまとめの学年であるため、動きづくりと同時に、タイミングよく滑らかな動きができることも目標として学習を進める。そのため、今回は、単元として【(ウ)基本的な動きを組み合わせる運動】を重点的に取り扱うこととした。

本時で使用する用具については、**短縄**を使用する。短縄を使用するメリットとしては、

- ①児童にとっても身近な道具である。
 - ②限られた空間でも律動的な運動を行うことができる。
 - ③跳び方や人数の工夫が多様である。
- の3つが挙げられる。

《体を移動する運動》

姿勢や方向、リズムを変えて移動をする動きを行うために、4つの場を用意する。

①プロペラキャッチ・・・二人組で行う。一人はゴム鉄砲でプロペラを飛ばし、もう片方はキャッチする。

→ 膝を軽く曲げ、腰を落として、すぐに動けるような姿勢を作る。



- ②フィッシング…友達が吊した仕掛けを思い切りジャンプしてキャッチする。
→ 腕を振り上げ思い切りつま先でジャンプする。
- ③くねくね段ボール…段ボールで作ったコースを、左右に避けながら走り抜ける。
→ 大小の歩幅を使い分けることで、スムーズに移動する。
- ④カンぽっくり…カンぽっくりを使って、くねくねの道を進む。
→ 腕と足をタイミング良く動かし、自分の思い通りの道を進む。



《基本的な動きを組み合わせる運動》

今回は、「短縄を跳びながら移動をする」という、用具を操作する動きと移動をする動きの2つの組み合わせを行う。短縄の基本的な技としては、駆け足跳びや両足跳びで前に進む運動について全体で確認を行った。また、前時に大縄の中で短縄を跳ぶという組み合わせを学習した。その学習において、子どもたちは、回数に注目をする視点や前跳びや後ろ跳びなどの工夫が自然と出てきた。本時では、グループの中で、**友達と**「オリジナル技」を考え、それらを発表する流れを組んだ。

○児童の実態

本学級の児童は、休み時間にほぼ100%外に出て校庭で鬼ごっこをしている。また、50m走の記録のみに関してではあるが、全国平均よりもタイムが速い。また、全体の傾向として運動にすすんで親しむ姿勢がある。しかし、学習や運動を問わず、与えられた課題には一生懸命取り組むが、自分から目標を決めて取り組むといった活動については消極的な部分が見られる。そのため、本単元の学習を通して、自分（たち）で目標を設定し課題を発見すること、その課題を解決する方法を考え実践していくことを身につけさせていきたい。

5. 「アクティブ・ラーニング」の視点

【視点1】グループ活動を基本にした授業

単元を通して、7（8）人のグループで授業を行う。グループ構成を、運動の得意な児童と苦手な児童を合わせた。そのねらいは、同じグループ内で、技ができる子ができない子に対してポイントを説明する（教える）というかわりが生まれてほしい、というものである。教えている児童にとっても動きのポイントを言葉で説明することで、思考力・判断力が鍛えられ、技能の向上にもつながると考えられる。

【視点2】動きのポイントを意識できる掲示物の工夫

単元を通して、意識した体の使い方（動きのポイント）を「めざせ！！なわとびマスター」として掲示する。

《用具を操作する運動》では、輪を転がすときの手首の動きを素早くすることや一度体を大きくひねってから転がすとより大きな力が伝わることなど、動きのポイントを整理する。それらに加え、《体を移動する運動》では、膝を軽く曲げることなどをポイントとして挙げることで、全身の使い方を意識できるようにする。





これらのポイントを、短縄の《基本的な動きを組み合わせる運動》で意識させることで、動きのポイントはそれぞれ共通しているといった気付きへとつなげていく。

6. 本時について

(1) 本時の目標

- ・基本的な動きを組み合わせた動きができる。(運動の技能)
- ・自分(たち)にできそうな技、やってみたい技など、課題にあった運動の行い方を選んでいる。(思考・判断)

(2) 本時の展開

時間	○学習活動 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点 ◆評価
導入 6	1 整列 挨拶 2 準備体操 3 本時のめあての確認	◇児童の服装や健康状態をチェックした。 ◇音楽に合わせて楽しい雰囲気を作った。 ◇前半と後半のめあてを両方掲示した。
それぞれのコーナーで動き方を工夫しよう		
展開 ① 14	4 サーキット運動 【体を移動する運動】 ※1つのコーナーでは3分	◇①の場で、後ろ向きになってキャッチする動きの工夫を紹介した。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>[ホワイトボード]</p> <p>①キャップキャッチ ②フィッシング</p> <p>↑ ↓</p> <p>④カンぼっくり! ③くねくね段ボール</p> <p>← →</p> </div>		
展開 ② 20	5 短縄 【基本的な動きを組み合わせる運動】 短縄を使って友達とオリジナル技を作ろう ○グループでオリジナルの組み合わせ技を作った。 ・全員で一つの前跳びをやってみよう。 ・跳ぶ方向を逆にしたら面白いんじゃないかな。 ・片方が途中から入るよ。 ・あのグループのやってみようよ。 6 片付け	◇それぞれの場で、工夫している動きを賞賛しながら、安全に配慮するよう声かけを行った。 ◇4つの場が終わった後、片付けを行い、一度全体で集合してから、改めて後半のめあてを確認し
		◇それぞれのグループでできた技を発表し合い、印象としてできそうかを相談した。
まとめ 5	7 まとめ・整列・挨拶 ・友達とオリジナルの技を作るときは、タイミングを合わせる事が大事。 ・リズムを決めると、合わせやすかった。	◆友達と協力してオリジナル技を作ることができた。(観察・ノート) ◇工夫したことを全体共有した。

(3) 本時の評価 ・基本的な動きを組み合わせた動きができた。(運動の技能)

- ・自分(たち)にできそうな技、やってみたい技など、課題にあった運動の行い方を選ぶことができた。(思考・判断)

・本時について

(1年生 山田実践)

1年生にとっての思考判断はどうあるべきなのかというのが、参観者の最も大きな関心事であると感じた。1年生なので、「ただ運動ができればよい」という考えは短絡的であり、実際にはもっと考えることができる。一方で、発達段階的には自分と他者について無関心であるため何を軸に思考判断をさせるかが肝心である。体づくり運動における縄跳びは、よく体力を高める運動のツールとして使われるが、今回は体ほぐしにおいては、調整や気付きとして扱われ、今日の子どもたちも試しながら運動を行っていた。短縄で跳んだ時に、相手が入ってくる動きがあったが、子どもたちから自然に出てこないかな?と欲していたところ、ある二人組が先生の所にやってきて披露した。やはり、先生が褒めてあげたり、認めてあげたりすることは1年生の学習意欲を高めるのであろう。ただし、わずか5分間で、他のほとんどの子が成功体験を得ることができなかったことは今後の研究課題である。その方法も、先生がそれを広めるか、ある子どもの気付きについてそれを広めていくか。今後は、戦略的に指導を行っていく必要がある。

(4年生 小林実践)

今回、大泉エクササイズを実践したが、ゆくゆくは大泉小学校独自の体操を作っていくので、子どもたちが真剣に取り組める運動がいいのではないかと。

1年生と4年生を比べた時に、運動の表れについては、さほど大差はない。ただし、4年生の方が、考えて試して、成功体験を得るというプロセスは確実に速い。縄跳びの教材的な価値は世代を超えているとも感じた。プロペラキャッチなどの教材については、子どもたちと一緒に作っている、子どもたちからも「大事にしたい」ということは感じられた。しかし、引き出した動きがその後、高学年に向けてどう発展していくのかということを検討する必要がある。

・「アクティブ・ラーニング」について

子どもたちは、動いている最中にも学んでいる。動き終わった後、ふり返って次の動きにつなごうとしている。45分という時間的な制約がある中で、「ふと考える時間」を設定できるのか、集団として時間をとった方がよいのか、工夫をしていくことが必要だろう。この点で、ボールゲームなどと比べて体づくり運動は、時間を設定しやすい。

本時でも掲示物が多くあったが、意外と子どもたちは見ていない。それほど、子どもたちは体を動かしたいという証拠であろう。そうやって見て考えている子どもを、どこかで価値づけていく必要がある。

時間的なものに関しては、共通で取った方がやりやすいかもしれない。

- ・**主体的** 比較の見えやすい ・**協働的** ペア・トリオでの関わり
- ・**深い学び** どうしている姿が、深い学びなのかについて具体的な姿を考えて、それを価値づけることにより、子どもと運動との関係をよりよいものとしていく。

1年生は運動に夢中になる。掲示物の有用性はあまり高くない。一方、4年生は掲示物の活用については意図的に仕込んでおくことで、種をまいておく。子ども同士で書いたコメントを読み合っただけで気付きを広げる。理論的な部分については、視点を持つことができる。PDCAのサイクルも上手に活用していく。研究授業も積極的に行っていきましょう。